

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 松本 康

本論文は、都市社会学の古典の位置を確立している「シカゴ学派」の研究がもつ現代的な意味を、都市研究の理論枠組みからトータルに捉えなおし、明晰に位置づけなおした研究である。当時のシカゴ大学の研究群の成立経緯を詳細に検証するとともに、都市改良計画、構造・機能主義や計量研究、ネオ・マルクス主義など、その時々 of 理論的・方法論的パラダイムから顧みて再構成されてきた特質を踏まえることで、さまざまな「神話」を冷静に脱構築している。

第1章では、19世紀後半から20世紀初頭までのシカゴ市の驚異的な発展と社会改革運動の展開を背景に、1920年代までのシカゴ学派が、アメリカ社会学のなかでいかに形成されてきたのかが論じられる。

第2章では、いわゆる「黄金期」のシカゴ学派の研究とされる5つのモノグラフが取りあげられ、その理論・実践的提言・調査方法の特徴が分析される。シカゴ学派を象徴する「同心円地帯理論」などは検証された理論枠組みというより、調査方法論が確立していないなかでの研究方針もしくは仮説と受けとるべきだと論じられる。同じく、都市の効果の本質を定義したと位置づけられ、評価されると同時に批判されている「生活様式としてのアーバニズム」や「社会解体」の議論が再検討され、その理論としての限界が提示される。

第3章では、1950年代から60年代にかけてのシカゴ学派をめぐるパラダイム転換が明らかにされる。新たなスタンダードとしての構造・機能主義の台頭と計量革命のなかで、「シカゴのコロンビア化」が進み、生態学の視点や手法が衰退していく。その一方で、シカゴの伝統を自らを位置づける研究者の全米への拡散は、計量的な研究法に対抗的なドラマツルギーやラベリング理論、グラウンデッド・セオリー等の諸潮流への注目にも結びつき、シンボリック相互作用論と質的研究のシカゴ学派というシンボルを生みだしていく。

第4章では、1970年代における都市地域コミュニティ研究とポスト・パーソンズ世代の社会的ネットワーク分析の展開が、都市社会学の「正統派」古典としてシカゴ学派を定位していくプロセスが分析される。そのなかで、解体論に収斂しない「コミュニティ問題」が提起され、アーバニズム理論批判としての「下位文化理論」が論じられる。

第5章では、同じ1970年代の都市社会学におけるネオ・マルクス主義の台頭のなかで、シカゴ学派が都市社会学の「正しき伝統」へと決定的につくりあげられていく過程が、ルフェーブル、アルチュセール、ハーヴェイらの理論や実践の綿密な分析のなかで論じられ、終章の「シカゴ学派とはなにか」という結論につながられていく。

本論文は、著者の長年にわたる都市社会学への取り組みを集約するもので、いわゆる「シカゴ学派」の理論的・実証的な遺産に対する、総合的で独創的な研究である。本審査委員会は、博士(社会学)の学位を授与するにふさわしいものと判断した。